

論 說

評議会の夢、自由民主主義の隘路 (一)

——アーレントと現代政治思想——

森 川 輝 一

目 次

はじめに

第一節 評議会の夢——ヤスパースの疑念

(一) 評議会革命のすゝめ?

(二) ハンガリー革命をめぐって

第二節 共和国の再生をめぐって——モーゲンソーとの共鳴と不協和

(一) 共和国の危機(以上、本号)

(二) 下からの参加、上からの統治

第三節 立憲政体と共和主義——ロールズとの重なりと隔たり

(一) 私的な自由と立憲政体

(二) 市民社会と代表制

第四節 自由民主主義の隘路——〈市民社会〉の没落

(一) 〈市民社会〉再考

(二) 〈市民社会〉の黄昏

(三) 政治の終わり(?)

むすびにかえて

はじめに

本稿は、政治思想家ハンナ・アーレント (Hannah Arendt: 1906-75) の評議会論をてがかりに、自由民主主義 (の危機) をめぐる前世紀中葉から今世紀初頭にかけての政治思想 (政治哲学、規範的政治理論) の展開を、批判的に検討することを目的とする。一九五六年一月のハンガリー革命——アーレントはこれを「動乱 uprising」ではなく「革命 revolution」と呼ぶ——をきっかけに、アーレントが自由民主主義に取って代わるべき新たな政体として、直接参加の「評議会 council」を基礎とする独特の共和政体を主張するにいたったことはよく知られているが、具体的な説明がとばしいこともあり、あまり注目されることはなく、本稿もまた、アーレントの評議会論それ自体を詳細に検討しようとするものではない。むしろ本稿は、まともな政治学者から見ればおおよそ取り上げるにも値しない評議会なるものを、自由民主主義の病理を克服する新しい政体構想として樂しげに公言してしまうアーレントという奇妙な政治思想家が、なぜ今日にいたるまで注目を集め、さかんに研究されてきたのかを——その末席を汚してきた一人として——あらためて問いなおすことを目的としている。アーレントが投じた波紋をてがかりに、現代の政治思想の来し方と行く末に目をこらそうとする試み、と言つてもよい。⁽¹⁾

最初に、アーレント政治思想における評議会 (論) の重要性を、古代のポリス (論) との対比で確認しておきたい。アーレントが政治の起源を古代ギリシアのポリスに求めたことはよく知られており、アーレントといえはポリスに範をとる古典古代の実践的政治概念の再興者、というイメージが定着している観があるが、じつは彼女はポリスについてさほど多くを語っているわけではない。生前に公刊されたアーレントの著作のなかで、ポリスについてのまとまった論述があらわれるのは『人間の条件』第二章の出だしの部分と、第五章の二七、二八節、同書公刊と同じ一九五八年の論文「自由とは何か」の第二節くらいである。たほう、評議会については、『人間の条件』第三〇節と、やはり同じ五八年

の論文「ハンガリー革命の省察」の第二節、その五年後に出了『革命について』第六章の後半で論じられており、量的にはポリスのために割かれた紙幅に匹敵する。⁽²⁾

とはいえ、アーレントといえはポリス、というイメージが定着したのも無理からぬ話ではある。

まさしくかつてのギリシア・ポリスは、活動を可能にする現れの空間(space of appearance)、自由が現れることのできる一種の劇場を人々に提供した「統治形態(form of government)」であった。

「政治的 political」という言葉を、ギリシア・ポリスの意味で用いるのは、恣意的でもなければこじつけでもない。まさしくこの言葉は、ヨーロッパのすべての言語において、ギリシア都市国家という歴史上唯一無比の組織に起源をもち、しかもたんなる語源分析や学識を越えて、政治的なものの本質と領域を最初に発見した共同体の経験を反響させている。(BPF: p. 154/208 Ⅳ)

なかなかインパクトがある。今日私たちが「政治(的)」という言葉をつかうたびに、はるかな古代に地中海沿岸のちっぽけな都市国家でおこなわれていた政治の記憶がいわば亡霊のように憑依してくるといふのだから、ただ事ではない(そもそも、現代の政治を考えなおすために二〇〇年以上前の政治経験をもちだす、という思考様式じたいが奇妙で、異常でさえあると言ふべきなのかもしれない)。政治的なものの根源的なとらえ直しとして評価するにせよ、有害無益なアナクロニズムとして論難するにせよ、ポリスという起源への立ちもどりがアーレントという思想家のユニークさのしるしとみなされてきたのは、もつともなことと思われる。

しかしながら、インパクトという点では、評議会論も引けをとらない。いや、現代世界をみすえた政治的な提言としては、はるかに過激な主張であると言える。

全体主義の諸制度の勃興を目の当たりにした現代の歴史家が、とりわけソ連の発展を取り上げるさいにうかうかと見過ごしてしまうものに、評議會のことがある。なるほど現代の大衆と彼らの指導者たちは一時的にはあれ、全体主義という、完全に破壊的なものとはいえ、まったくもって新しい統治形態の樹立に成功したわけであるが、同じように人民の諸革命のほうも、もう百年以上も前から、一度も成功したことはないとはいえ、まったく別の新しい統治形態を生み出してきたのである。すなわち、人民による評議會制度であり、それは、出現する前にもうすでに不信任に付されていたと言いたくなるようなヨーロッパ大陸の政党制に、取って代わるべきものである。(HC: sec. 30, p. 216/344頁; cf. COR: p. 124/115頁)

一般的な語法にしたがい、複数政党制をとまなう議會制民主主義を「自由民主主義 liberal democracy」と呼ぶことにすると、次のように言いかえることができる。現代における主要な政治体制として、①全体主義、②自由民主主義、③評議會の三つがあるが、この三つ巴のなかで、①の再来をふせぎ、②の頹落を克服すべき位置にあるのが③であり、そしてそれは革命のなかでこそ生まれるのだ——そうアーレントは言っているわけであって、素直に読めば、これは相当に過激な主張である。少なくとも、アーレントによれば政治的ポリスなものの本質は話し合いで物事を決めることなのだから市民どうしの熟議をもちあげて自由民主主義を立て直しましょう、とか、いやいやアーレントのポリスは熟議ではなく闘技の空間なのであるから差異をめぐる闘技の実践によつて自由民主主義を活性化すべきだ、とかいうたぐいの微温的な理論などより、はるかに過激ラディカルな内容であることは疑いない⁽⁴⁾。繰り返すが、政党や議會など有害無益だ、もはや自由民主主義の命脈は尽きた、ゆえに革命をおこして評議會制という新しい統治形態を創設すべきなのだ、とアーレントは主張しているのである。彼女の政治理論が本格的な研究対象となつて間もない時期、あからさまに自由民主主義を否定するがごときその危険な傾向性がしばしば批判や論難の対象となつたのも、けだし当然と言えるだろう。⁽⁵⁾

とはいえ、アーレントの評議會論の難点として挙げられるのは、その過激さや危険性よりも、非現実性のほうであることが多い。彼女の政治概念には共感をしめす好意的な論者でさえ、アーレントはなぜそんな、「政治におけるリアリ

「ズム」をはなから無視した「非現実的な主張」を展開するのか、と「当惑」を隠さない（Canovan 1992 : p. 237/304頁）。過激さを云々する以前に、「一度も成功したことはない」とアーレントじしんが認めるとおり、評議会はそもそも実現性に乏しく、非現実性という点からみると、二千年以上むかしのポリスにほんとうの政治を見いだす議論と大同小異と言えるのかもしれない。であれば、近現代の諸革命のなかでつかの間あらわれたとはいえずぐに泡と消えた評議会などより、ヨーロッパの歴史と思想のなかに不朽の足跡を刻んだギリシア・ポリスのほうが、まだしも華があり、論じ立てる価値がある、ということなのかもしれない。

古代のポリスと現代の評議会は、いずれも市民が直接参加して活動をおこなう小規模な公共空間である、という点で（のみ）共通しているのであるが、アーレントが明示的かつ積極的に主張したのは、古代のポリスの再興ではなく、あらたに評議会を創設する革命なのであるから、今日アーレントの政治思想を云々するのであれば、その評議会論をこそ問いの中心にすえなければならぬ。

第一節 評議会の夢——ヤスパースの疑問

（一）評議会革命のすゝめ？——一九七〇年のインタビュより

革命のなかで自発的に生まれる、というアーレントの評議会論の概要をつかむために、まずは一九七〇年のインタビュを参照することにしよう。英訳版の「政治と革命についての考察」というタイトルのとおり、評議会革命をめぐるアーレントの展望が、同時代の状況をふまえたうえで、ざつとばらんに語られているからである。

その冒頭で、六〇年代に各国で高まりをみせた学生運動について、あなたは肯定的な評価を与えるのですか、と問われたアーレントは、「肯定的 (positive)」という言葉をあんなどういう意味で使ってるの、賛成か反対かを単純に言える話ではないしねえ、と例によって話をややこしくしそうなそぶりを見せつつも、アメリカの学生運動を念頭におきなが

ら、彼女にしてはめずらしくはっきりと、ポジティブな評価を下している。

国による違いはもちろん非常に大きいのですが、そうした違いはすべて無視することにして、まずはこれが一つの国際的な運動である——このようなかたちをとった運動というのはこれまでなかった——ということを考慮したうえで、それぞれの国で運動に参加している世代が（目標、意見、教義は別にして）、それ以前の世代とほんとうに違うのはどういふ点かを考えてみると、まず私の目を引くのは、この世代の人たちの活動しようという決意、活動することの喜び（*Eng.*）、みずからの力で物事は変えることができるのだという確信です。〔……中略……〕

根本的な問いは、ほんとうのところ何が起こったのか、ということですが。私の見るところでは、じつに久しぶりに自発的、な（*spontane*）政治運動が起こったのです。たんに口先だけの宣伝ではなくて、じつさいに活動が、しかもほとんどもっぱら道德的、な動機から、（*aus moralischen Motiven*）、おこなわれたのです。そのために、「ふつうは利益や支配をめぐる競争と思われている」政治というゲームのなかに、私たちの時代の新しい経験が立ち現れることになりました。つまり、活動することは楽しい（*das Handeln Spaß macht*）、ということが明らかに became したのです。この世代が体験したのは、一八世紀には「*public happiness*」、つまり公的、幸福と呼ばれていたものです。人間が実存するということのうちには、公的に現れて活動しないかぎりは閉じたままにとどまる、とはいえ十分に「幸福」であるためには何らかの仕方が必要となる、特定の次元があります。それは、公的に現れて活動するとき、活動する者じしんに開き示されるものなのであり、これがまさに公的、幸福なのです。（*MIG: S. 107, 108f. cf. COR: p. 201f./196頁, p. 203/198頁——傍点一部森川*）

語られているのは学生運動であり、革命ではない。「革命」とは「自由の創設、すなわち自由が現れうる空間を保証する政治体の創設」であり、「近代の条件のもと」では「憲法の制定」でなければならぬ、というアーレントの定義にしたがえば（*OR: p. 116/191*の画）、学生たちの運動は人種差別やヴェトナム侵攻といった不正への抗議や抵抗にとどまり、革命の段階にはいたっていない。しかしながら、すぐあとの箇所「革命」という語を使っていることから分

るように、アーレントがそこに来るべき評議会革命の萌芽を見いだしていたことは、疑うべくもない。

右の発言によれば、革命は第一に、「自発的」な運動として始まる。すなわち、前衛党や職業的革命家といった一部のエリートが引き起こし、綱領やイデオロギーの実現へ向けて大衆を導いていくものではなく、市民一人ひとりが自発的におこなう活動の連鎖のうちから、自生的に (spontaneous) 始まるものでなければならぬ。第二に、そうした活動へと人々をうながすのは、「道徳的な動機」である。ここで「道徳」の規準となるのは、個人の良心に照らした善悪ではなく、公共のもの (res publica) という観点から見た正・不正であり、学生運動の場合であれば、アメリカという共和国 (republic) の不正をただす、という動機から若者たちは立ち上がったということである。⁽⁶⁾そして第三に、道徳的動機から自発的に始まる活動のなかで、人々は「喜び」を味わう。若者たちが政治運動において味わった(とアーレントが考える)「活動することは楽しい」という体験が、一八世紀末のアメリカ独立革命において人々が体験していた(とアーレントが信じる)「公的幸福感」と結び合わされるゆえんについては、『人間の条件』第五章および『革命について』第三章の読解を俟たねばならない。ここではさしあたり、自発性と道徳性という要素に着目して、アーレントの評議会論と、亡命時代の思想形成との結びつきを確認しておこう。

カノヴァンが見事に要約してくれているように、アーレントは「政治における良心の役割に異議を唱える」が、それは良心のはたらきや意義を否定するためではなく、政治的領域における正義の追求は、個人的な良心ではなく「公的原理によって呼び起こされる活動」によらねばならない、という確信ゆえであった。「アーレントじしんのヒーローやヒロインは、まさに公的原理のために闘った人たちである。ドレフュス事件の立役者たち、すなわちベルナル・ラザールは「公平な法のための闘士」であり、クレマンソーは「正義、自由、公民的徳 (civic virtue) といった(抽象的)理念」の擁護者であった。ジュダ・マグネスは、パレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人のために正義を求めた。ローザ・ルクセンブルクは正義と政治的自由のために闘った」(Canovan1992: p. 194f./252頁)⁽⁷⁾。無名の亡命者であった頃、

アーレントは彼らのような人々、すなわち、自己の利益や幸福ばかりを追い求める「成り上がり」や「ブルジョワ」に墮すことを潔しとせず、公的原理のためにすすんで闘う少数の人々を、「自覚的パリア (conscious pariah)」ないし「公民 (citoyen)」と呼んでいた (森川二〇一〇: 211-212)。彼らのような人々こそが世界を墮落と破滅から救うのであり、もし彼らのような人々が声を上げるべき空間を失い、あるいは奪われてしまうなら、私たちの世界は、ブルジョワの成れの果てである「暴徒 mob」と「大衆 mass」によって制圧されてしまい、滅びの道をひた走ることになるだろう——事実そうだったのであり、ナチの猛威がついえた今もなお、その危険性は消え去っていない。そう考えるアーレントは、「道徳的な動機」から「自発的」に政治運動をはじめた六〇年代の若者たちに、「久しぶりに」現れた公民たちを見いだし、喝采を送っているわけである。

さて、こんどは結びの部分に飛び、アーレントが評議会について説明しているくぐりを検討してみよう。

評議会は言うのです、私たちは決定に参加したい、と。何らかの場所で、私たちの声を人々に公然と聞かせたいのだ、と。みんなが集まって決めることができればよいが、そうするには国は大きすぎるので、国のなかに一つひとつ公的空間を設ける必要がある。投票用紙に書き込むための小部屋は、一人しか入れないから、公的空間としては小さすぎる。政党はまったく適していない、というのは、政党から見れば、私たちは単なる票田でしかないからだ。けれど、(a) たった十人でもよいから、人々がテーブルのまわりに座り、それぞれが自分の意見を口に出し、他の人の意見に耳を傾けるなら、複数の意見の交換をつうじて理性的な意見を形成することが可能になる。また、そこでの討論によって、一つ上の評議会で私たちの意見を述べるのに誰が最もふさわしいかが明らかになるだろう。一つ上の評議会において、私たちの意見は他の意見の影響のもとで今一度検討に付され、訂正を受けたり、誤りを指摘されたりすることになるだろう。(英語版はここで改行) もっとも、一国のすべての住民が、そうした評議会の一員になる必要はありません。政治に関心をもちたい、と誰もが欲するわけではありませんし、関心をもたなければならぬ、ということでもないからです。このようにすれば、(b) 一国のほんとうの政治的エリートたち (winklich politi-

sche Elite)を引き寄せるための、自己選別的な過程 (Selbstausleseprozess) が可能となります。公的な事柄に関心をもっているのは誰かという基準にしたがい、こうしたエリートたちの自己形成がおこなわれる (sich bilden) わけです。公的な事柄に関心のない人は、公的な決定が自分抜きでおこなわれることを甘受しなければなりません。しかし、どんな人にも機会を与えられなければなりません。

私はこの方向に、新しい国家の概念が形成される可能性を見るわけです。このような評議会国家は、主権の原理とはまったく無縁のものとなりますから、さまざまな種類の連邦に、すばらしく適したものとなるはずですよ。というのも、連邦では、権力は垂直的ではなく、水平的に構成されるからです。もつとも、実現の見通しはどうか、といま尋ねられるのであれば、もしあるとしても、ほんのわずか、と言わねばなりません。それでも——(γ) つぎの革命が盛り上がれば、ひよつとすると、できるかもしれません。(MUG: S. 132f. —記号と傍線・強調は森川ユウヂ; cf. COR: p. 232f./233画)

アーレントは、いったい何を言っているのだろうか。どうやら、(α) 人々が自発的に集まって議論を交わすと、(β) そのなかで誰がいちばん公的な問題になう能力をもつ選良^{エリート}であるかがおのずと明らかとなるから、そうした「自己選別的な過程」をくり返していけば、真の政治的リーダー(たち)が選ばれることになるのであり、しかもそれぞれの評議会における選抜や決定は人々の対等な、つまり非主権的な議論にのみもとづくのであるから、この方法で形成される国家は、脱主権的な連邦制のかたちをとるはずだ、ということらしい。らしい、と曖昧な言い方をするのは、そのプランの実現可能性が、(γ)「つぎの革命が盛り上がれば」という不確実きわまりない条件にゆだねられているからであるが、学生運動について語られていた言葉を考えあわせると、こういうことになるのではないか——「道徳的な動機」から「自発的」に公的領域に姿をあらわす人々は、活動する喜びを味わいながら評議会をかたちづくるのだから、晴れ晴れとした心で私心なく語り合い、おたがいのあいだで「ほんとうの政治的エリートたち」を選び抜き、こころよく送り出すことができるだろう、と。

こうしたアーレントの評議会論を、どう評価したらよいのだろうか。なるほどそれは、革命の初期段階で自然発生的にあらわれる「評議会という自己統治組織の理念的本質」を、うまく言い当てているのかもしれない。しかしながら「内容があまりにも理念的というか観念的でありすぎて、実現の幻想すらもちえない」と言うほかないのではないか（上村一九九七・192頁）。なぜこんな、政治理論と呼ぶにはあまりにもお粗末なアイディアを、アーレントは、さも、楽しげに、公言してしまうのか。

（二）ハンガリー革命をめぐる——アーレントの熱狂、ヤスパースの疑念

思考は出来事の意味を問う過程であり、つねに生ける人々の経験と結びついている（*HPF: p. 1416*）。評議会をめぐるアーレントの思考もその例外ではなく、一九五六年のハンガリー革命という出来事を始まり^{アルペー}としてもつ。当時ヨーロッパに滞在中だったアーレントは、ハンガリーに対するソ連の軍事介入が、同時期に発生したスエズ動乱（第二次中東戦争）と連鎖反応を起こして新たな世界大戦を誘発することを危惧しつつも、自由を求めて立ち上がったハンガリーの人々に喝采を送り、彼らの活動を「暴動」や「叛乱」ではなく、「革命」の名で呼ぶ。もちろん彼女はその現場に居合わせたわけではないが、フランス革命に対するカントのような注視者（*spectator*）の位置に身をおき、その出来事に新しい始まりを見いだして、文字どおり熱狂したのである。興奮をかくさずヤスパースに書き送っているところによれば、そこにあらわれたのは、人々の自由な活動によって「評議会」という「新しい国家形態」が「おのずから *spontan*」出現する、という奇蹟のような出来事であった（*Arendt/Jaspers: S. 342f/2. 89*頁以下；cf. *Arendt/Blücher: S. 451/406*頁）。

評議会への関心そのものは亡命時代にさかのぼることができるが、評議会論の成立に決定的な影響をおよぼしたのがハンガリー革命であったことは、評議会への明示的な論及が始まるのが五八年以降であることにあきらかであろう。その最初のものが、五八年二月に公刊された論文「ハンガリー革命の省察」であるが、そこでアーレントは何よりもまず、⁽⁸⁾

革命が「知識人と大学生、それも総じて若い世代」を担い手として始まり、「彼らの目指すところが、自らや同胞市民たちの物質的な窮乏ではなく、もっぱら自由と真実に存した」ことを強調してやまない。虚構のイデオロギーを排して「真実」を語りたいという衝動が、学生たちを街頭へと向かわせ、言論の自由を求める「数千の学生たちのデモンストレーション」は、またたく間に「労働者」や「兵士」をも巻き込んだ「巨大な民衆運動」となって、多様な語り合いの空間、すなわち「評議会」の自発的な生成をもたらしたのだ、というのである（RH: pp.23-25）⁽⁹⁾。

同じ年に公刊された『人間の条件』の用語で言い直せば、政治とは、私的な利益ではなく公的な関心（人々の間にあるもの *Interests*）にかかわる営みであり、公的領域における対等な市民の自由な語り合いを旨とする。公的領域では、多様な意見が現れ、競い合い、またそれをつうじて、意見の語り手各々が他者の前にみずからのユニークな姿をさらすことになる。この意味で公的領域とは「現れの空間」であり、その原型は、オイコス（家政）と区別されたポリスにおいて、「強制と暴力ではなく、言葉と説得によってすべてが決定されていた」古代のアテナイ民主政に見出される（HC: sec. 4, p. 26/47頁）。しかしアーレントはハンガリー革命の「評議会」に、ポリス論では触れていない重要な政治機能をみとめている。それは、政治的代表（者）の選出という機能である。

アーレントいわく、西欧諸国を中心にひろく行われている代議制民主主義は、真に民主的な代表選抜システムではない。諸政党は「党内官僚と指導者」の寡頭制的支配のもとで、特定の「階級的利益」あるいは「世界観」を代表しているに過ぎず、自由な意見の表出と競合を抑圧しているからである。これに対して、ハンガリー革命時の評議会においては、代表の選出自体が自由な討論に委ねられていた。各評議会の代表は、イデオロギー的観点からでないことはむしろ、経済的な利益代表という観点からでもなく、「もっぱら人間としての評価によって、つまり、その者が自分たちの代表となるために十分な人格の高潔さ、勇気、そして判断力を備えているかに従って」、言い換えれば、すぐれた「意見」を述べて人々を「説得する」という「政治的な能力」に即して選出された。この「評議会制」こそ、「政党制」にとっ

て代わるべき「民主的な代表選出のための唯一のオルタナティブ」なのだ、というのである (RHR: pp. 29-32)。こうした評議会の代表選出機能を、アーレントは『革命について』第六章において「政治的エリート」という言葉をつかつて論じなおすことになるが、議論の枠組みじたいに大きな変更は見られない。七〇年のインタビューで語られる評議会論の輪郭は、五八年のハンガリー革命論の時点で、おおむね出来上がっていたと言つてよい。

ハンガリー革命は、始まってからわずか二週間ほどでソ連軍に踏みじられることになったが、もしそうならなければ、自発的に組織されたあまたの評議会のなかから、「ひよつとすると」評議会国家という新たな統治形態が生まれ出ることになった、のかもしれない。その可能性がゼロであった、とは言い切れないにしても、かぎりなくゼロに近いというほかなく、いずれにせよ成功の見込みを裏付けるものは何もない。そもそも、街頭の運動からおのずと真正なる政治体が生まれ出るという想定は、あまりにもナイーヴであり、危険ですらあるのではないか。いち早くその点を指摘したのが、アーレントが敬愛するヤスパースであった。

アーレントのハンガリー革命論を読んだヤスパースは、書簡で率直に疑問を述べている——自分には、「マックス・ウェーバー」もかわりをもつた「ドイツの評議会時代の記憶」がある。あなたの考察によれば、評議会は特定の統治者をもたず、人々の「意気盛んで有能な活動ぶり」を支えとすが、逆に言えば、「ひとたび政府 (統治 die Regierung) が成立するや、評議会の意味は失われてしまう」ことになる。「そうならないとしたら、つまり評議会を廃止し、悪平等的な大衆選挙によつて政府をつくりだす、という道をとらないとしたら、その結果は『協同体国家』とならざるをえないのではないのでしょうか? あれほどムツソリーニがこの概念を濫用してんでもないことをやったのに、この概念はふしぎな魔力をもっている。あたかも専門知識や、人柄や、使命感にもえる精神 (Der Geist von Berufenen) が、ステイーブンソンではなくアイゼンハワーを選挙 (五六年米大統領選挙) に勝たせたあの愚民の総意、不毛な砂漠に対して、勝利を収めることができる、とでもいうかのように! 中世から刺してくる、目を欺きやすい輝き。評議会をひじょう

に高く評価したときのあなたは、正確には、どういふことを考えておられたのか?⁽¹⁰⁾。ヤスパースが「ファシズム評議会」を最高機関としたムツソリーニのコーポラティズム国家を引き合いに出すのは、たんなる名称の一致のためではないだろう。ファシズム運動は街頭での示威行動によって支持者を増やし、運動の活力を高め、普通選挙と複数政党制を否定する新たな国家体制の構築に向かったのであり、同じことはドイツのナチ運動にも当てはまる。アーレントのいう「評議会」もまた、その危険を免れないのではないか。公的な事柄に関心のある者が自発的に加わる評議会では、エリートリートのの「自己選択的な過程」が実現される、とアーレントは言うが、ヒトラーのごとき暴徒モップが乗りこんできて、こぶしをふりあげスローガンをわめき散らし、それにアイヒマンのような大衆マヌが歓呼で応じて忠誠をちかう——という展開にはならない、となぜ言えるのか。⁽¹¹⁾

民主主義の現状に危機感を募らせていた点は、ヤスパースも同じである。しかし、だからといって、議会制そのものを否定してよいのか。「選挙という手続きをとり、諸集団を選び出して配置するという技法と順序のうちに、民主主義的な制度の核心がある」ことは揺るぎなく、「民主主義の道が自由に通じうることを信じ」て、議会制民主主義の改善をめざすべきではないのか。⁽¹²⁾ 普通選挙と複数政党制を否定して、革命のなかから自生的に現れる「評議会」なるものに新たな統治形態の構成を託すとは、どういふことなのか。ヤスパースならずとも、そう眩くらきたくなるころである。アーレントはいつた何を考えているのか。

第二節 共和国の再生をめぐつて——モーゲンソーとの共鳴と不協和

視点を変えてみよう。評議会が何かはよく分からないが、評議会を構想するにあたってアーレントが何を念頭においていたのかは、はっきりしている。先に引いた七〇年のインタビュの英訳版を収めた著書のタイトルのとおり、「共和国の危機 Crises of the Republic」がそれであり、ここで「共和国」とは、彼女にとって第二の祖国となったアメリカ

カ合衆国をさしている。アーレントをして評議会の夢へとかりたてたのは、合衆国が危機に瀕しているという切迫した認識であったわけだが、そうした危機感には彼女ひとりのものではなかった。たとえば彼女と同じようにドイツから逃れ、アメリカの地で国際政治学者として名を成したH・モーゲンソーは、一九六〇年に著した『アメリカ政治の目的』において合衆国の現状を痛烈に批判し、正道への復帰を訴えている。アーレント終生の友であり、一般には国際政治学におけるリアリズムの祖と目されるモーゲンソーのアメリカ論との比較対照は、アーレントが共和国の危機をどのようにとらえ、なぜ評議会をオルタナティブとみなしたのかを考えるうえで、有益なヒントを与えてくれるのではないか。

(一) 共和国の危機——モーゲンソーとの共鳴

アーレントの政治理論が「ポリス的公共圏の再興」といったイメージにおさまるものではないように、モーゲンソーの国際政治学もまた、「古典的リアリズム」というレッテルでは汲みつくせない思想的広がりをもつ。モーゲンソーは、国益をめざす諸国家の闘争を冷徹に見つめる現実主義者であると同時に、「客観的な道徳秩序」の実現という理念を終生捨てることなく(宮下二〇二二)、六〇年代以降には、ヴェトナム戦争の泥沼化にともなう合衆国の混乱と衰退に危機感を深め、市民の自発的参加による公共精神の再生を説くアーレントの共和主義的な政治観に共鳴するようになった(Klusmeyer 2011; Rosch 2013)⁽¹⁴⁾。また、ヤスパースの『原子爆弾と人間の将来』に感銘を受け、アーレントのすすめで同書のレビューを書き、核兵器の国際管理をめぐる構想を練り上げていったという(Schneerman 2009, pp.146ff, 174ff)。こうした先行研究の成果に学びつつ、モーゲンソーの『アメリカ政治の目的』と、その三年後に公刊されたアーレントの『革命について』とを併せ読むと、合衆国の危機の診断において、二人の視線が大きく重なっていることが分かる⁽¹⁵⁾。

『アメリカ政治の目的』の冒頭で、モーゲンソーはいう——現在の合衆国は、「この国の中心的な目的との有機的な結びつきを失っている」(Morgenthau 1960, p. 3)。アメリカ政治の目的とは「自由のなかの平等 equality in freedom」の

実現であり、合衆国という新しい国家は、その目的のために、「事物の客観的な秩序 the objective order of things」にしたがって、建国されたのである。ピューリタニズム、ロックの自然権思想、ローマの共和主義など、アメリカがしたがうべき「客観的な秩序」を語る言葉は「さまざまであった」が、たしかなことは、「アメリカはそうした秩序のイメージのもとに、すなわち、宇宙的な秩序と人間社会の両方がその存在を負っていると考えられる客観的な諸真理 objective truths の光のもとに、建国された」ということである (p. 15f)。「自由とは、元来のアメリカ的意味において、恒常的な政治的支配からの自由」であり、「平等とは政治的支配へのアクセスの平等を意味」しており (p. 22)、その実現をはかった独立革命こそ「歴史上で唯一の真正な革命」にほかならないが、それは一八世紀末に突然始まったわけではなく、一六二〇年のメイフラワー誓約に始まるながい前史をもつ (p. 30)。アーレントの場合にはタウンミーティングにおける政治参加の体験が強調される、という力点の違いこそあれ、建国の原理をメイフラワー誓約に始まる「相互の約束」の反復に求め、合衆国の創設を自由の「絶対的に新しい始まり」と位置づける『革命について』の独立革命観と、大きく重なると言つてよ (OR: p.158f/258頁, p. 203f/336頁以下; cf. 宮下二〇一一: 241頁¹⁶)。

しかしながら今日の合衆国は原初の目的を見失い、物質的な豊かさの追求と、場当たり的な軍事行動の反復におちいり、冷戦の相手方となつたソ連に対する道義的な優位性をみずから捨て去つていく。それは「自由のなかの平等」を求める世界の人々の期待をうらぎり、却つて彼らを共産主義のほうに走らせてしまう、という国益の損失をもたらしているというのに、そのことに気づく者さへほとんどいない。そう悲憤慷慨するモーゲンソーは、そうした墮落の国内におけるあらわれを、「現状維持の快樂主義 (hedonism of the status quo)」と呼ぶ。すなわち、自由の意味を私的欲求の充足と取り違えた人々が、あくなき消費を求める「浪費社会 a society of waste」に埋没して、公共精神を失つていく事態である。「公的な問題への関心の欠如 (……) の結果、市民は真正な政治行為から手を引き、公的領域は私的な利益に侵食され、公的な目的に向けられるべき国の人的、物的資源はますます目減りしている」 (Morgenthau 1960 : p. 203)。

「独立宣言や『ザ・フェデラリスト』において、一般的な福祉という意味で公的幸^{public happiness}と呼ばれていた幸福という概念は、今日ではもっぱら私的な、主として物質的な幸福という意味合いをもたされている。幸福と富^{wealth}が、ほとんど同義語になりつつある」(p. 204)⁽¹⁷⁾。個人的な快樂をむさばる現今のアメリカ社会は、「アメリカの目的の達成が、アメリカの生き残り^{サバイバル}そのものにかかわる」ということを忘れてしまっているのである——「もしそれ〔目的の達成〕に失敗すると、世界の諸国は、模範とすべき社会的組織と政治的諸制度のモデルを他に求めることになり、敵意に満ちた世界のなかで、われわれは一人ぼっちになってしまう」というのに (Morgenthau 1960: p. 299f)。

建国の理念の忘却は合衆国の破滅をもたらしかねない、というモーゲンソーの危惧に呼応するように、アーレントも警鐘をならす。たとえばキューバ革命にさいして、自由と尊厳をもとめるキューバの人々の「革命精神」を一顧だにせず、かえって彼らを東側に押しやってしまったように、今日の合衆国は、みずからが革命で生まれたことを忘れ、革命の芽を摘むことに血道をあげている始末である (“The Cold War and the West”, TWB: p. 253f)。「革命への恐怖が、現状維持 status quo を絶望的に試みるという戦後のアメリカの外交政策の隠れたライトモティーフなのであり、その結果、アメリカの力と威信は、その国の国民のあいだでなごらく憎悪と軽蔑の対象となつていくような時代遅れで腐敗した政治体制を支えるために用いられ、また誤用されたのである」(OR: p. 208-9, 353ff; cf. 宮本二〇二: 242頁)。

とめどない私化 (privatization) の進行と、それにとまなう公共精神の喪失のために、合衆国の政治は理念をうしない、実力まかせの現状維持に走って衰亡の危機をみずから招き寄せているかのようですらある——ナチの猛威を逃れてアメリカの地を踏み、みずからの意志で合衆国民となった二人の元亡命者の憂慮は深い⁽¹⁸⁾。とはいえ、危機の所在と起源、そして危機を克服する方途をめくり、二人の思考はすくなくならぬ隔たりをみせることになる。

(一) アーレントの評議会論の全体像は、「人間の条件」における「活動 (action, Handeln)」の理論的省察、および「革命について」におけるアメリカ革命論との関連をふまえて、明らかにされなければならない(そのラフなスケッチとして、森川二〇〇)。本稿はその序論部分にあたる。

なお、本稿の第一節と第三節は、森川(二〇一六)および森川(二〇一七b)をもとに、新たな知見を加えて書き下ろしたものであり、内容が一部重複することをお断りしておく。また、本稿では「政治思想[Political Thought]」「政治哲学[Political Philosophy]」「政治理論[Political Theory]」を厳密に区別せず、互換可能な用語としてもちいる。

(2) アーレントの政治思想をその評議会論を中心に考察したものとシフ・Ston(1994)、『Mudloon(2016)』、『Lederman(2019)』などがある。また、石田(2009)は、評議会論そのものに論及した部分はさほど多くないものの、アーレントとワイマール期保守革命派との距離や、彼女の特異な革命論のうちに評議会を位置づけようとする論考であり、本稿も少なからぬ示唆(と刺激)を得ている。

(3) ポリスを直接のテーマとしないベンヤミン論のなかで唐突に語られる、次の一節も参照——「ギリシアのポリスは、私たちが「政治[polis]」という言葉を使用するかぎり、私たちの政治的生活の根底、すなわち海の底に存在し続けるだろう」(BIB: p. 204/245頁)。

(4) アーレント解釈史を軸に、「熟議デモクラシー」や「闘技デモクラシー」をはじめとする現代政治理論の議論状況を概観したものとシフ、森川(二〇一〇)：第一章。

(5) Jay 1978; Mckenna 1984; Karch 1984. アーレントの「手すりなき政治 banisterless politics」は、代議制を否定して、無軌道な行動主義を称揚するものではないのか (Mckenna 1984: pp. 35ff.)。こうした当時の解釈状況を踏まえて、アーレントの政治理論を「現代政治哲学の隘路」と重ね合わせるのが、一九八七年の川崎修の論文「ハンナ・アーレントと現代政治哲学の隘路」である。川崎によれば、アーレントの政治理論のなかには、アリストテレス的な「共和主義」、カント的な「普遍主義」、「政治的実存主義」ないし「アゴンのモダニズム」という、それぞれ現代政治哲学の潮流に対応物を見いだすことのできる三つの要素が併存している。そして、前二者が、ちょうどガダマーとハーバーマスの対立に相当する方向性の違いこそあれ、「コンセンサス」の確立と規範的秩序の構築を志向する点では共通しているのに対して、第三の「アゴンの「モダニズム」においては、活動における「始まり」を強調するアーレントの「行動主義」があらわとなり、コンセンサスを解体する「無制約な闘争」へとつながるのではないか、という(川崎二〇一〇a: 211-2頁; cf. Mckenna 1984: p. 335)。

(6) いわく、「革命の歴史を見てみると、革命を先導するのは、辱められ、貶められた人々じしんではなく、自分はその目にはあつていないけれども、他の人々が辱められ、貶められていることに我慢できなかった人々なのだ、ということが分かります。ただ、そうした人々は、道徳的動機を認めるのが恥ずかしかつただけです——こうした恥じらいは大昔からあるものです。[...]」ともあれ道徳的動機という要素は、今日では以前よりはつきりと現れるようになったとはいえず、革命の現場にはつねに存在していたのです」(Aug: S. 110, cf. COR: p. 204/199頁)。また、「革命について」第三章の冒頭で「いわく、「革命がどれだけその門戸をひろく貧民大衆にひらいていたとしても、大衆によって始められた革命はこれまでなかった」(OR: p. 106/178頁)。

(7) ドレフュス事件とラザールやクレマンソーに対するアーレントの評価、またイスラエル建国前夜のシオニズム運動内部でのマグネスとの共闘(と挫折)については、森川(二〇一〇)：107-116頁を参照。なお、引用した部分でカノヴァンが念頭におかれているのは、「良心[conscience]」を

はじめとする内心の道徳と、公的領域における政治とを厳格に区別しようとするアーレントに対する、ケイティブの批判である。アーレント解釈としてはカノヴァンの理解が適切であるが、ケイティブのアーレント批判の背景には、(彼から見ればアーレントが正当な敬意を払っていない) ソローやホイットマンなど、一九世紀アメリカ文学にケイティブが読み取る「民主的個人性 democratic individuality」を中核とする、ケイティブじしんの政治思想が存している(森川二〇一〇a)。

(8) アーレントの評議会論のいくつかの起源 (origins) として、(1) エスバルタカス団員だった夫 H・ブリュッヒャーの影響、(2) シオニズム組織で活動していた一九三五年にパレステイナを訪れてキブツを見聞したこと、(3) R・ルクセンブルクが『ロシア革命論』などで論じている評議会民主主義論の影響、が挙げられるが、「アーレントが評議会制を構想する転換点となったのは、一九五六年のハンガリー革命である」(Muldron 2016: p. 763)。(1)ブリュッヒャーとアーレントの関係については、寺島二〇一三: 第五章を参照。(2)キブツ体験については、アーレントが四〇年代後半以降にシオニズム運動そのものに批判的になったこともあり、ハンガリー革命以降の彼女の評議会論に影響を与えた形跡は認められない(Muldron 2016: p. 777; Lederman 2019: p. 156)。彼女の評議会論に大きな影響を与えたと考えられるのは(3)ルクセンブルクの評議会論であるが、アーレントがその真価に気づいたのは一九五六年以降であったと見るべきであろう。アーレントは、『全体主義の起源』(初版一九五一) 第二部において一九世紀の帝国主義運動を考察するさい、ルクセンブルクの『資本蓄積論』に大いに依拠した議論を展開しているが(川崎二〇一〇a: 162頁)、評議会論には言及していない。これに対し、一九六六年のルクセンブルク論では、革命は「下から」、「自然発生的に」起こるもので、その過程で評議会という「共和政」的な組織が出現する、ということの確にたもたらえたルクセンブルクの洞察をたかく評価しているのである(MDT: p. 511, 68頁)。ハンガリー革命が起こったのち、アーレントはあらたにルクセンブルクの『ロシア革命論』に立ちもどり、独自の視点から読み解くとともに、ルクセンブルクが非業の死をとげた一九一九年のドイツ革命をめぐるブリュッヒャーの記憶にあらたな光を当てながら、みずからの評議会論およびアメリカ革命論を編み上げていったのであろう(Muldron 2016: p. 767, 770)。

(9) この論文「全体主義的帝国主義——ハンガリー革命の省察」は、スターリン死後のソ連の「全体主義的帝国主義」化を考察した第一節および第三節が、ハンガリー革命を論じた第二節を挟み込む構成になっている(『全体主義的帝国主義』の部分については、牧野二〇一五: 第六章、を参照)。同年秋に公開された英語版「全体主義の起源」の第二版(一九五八)の新たな終章として収録されることになり、タイトルが「ハンガリー革命の省察」へと変更されるが、本文はほぼ同じである。「起源」第二版公刊に寄せた短い文章で、アーレントは述べる——「一八四八年以降のヨーロッパのすべての革命のなかで、評議会制が演じてきた役割についてまったく知らなかったわけではないが、それがふたたび起こるという期待などしていなかったし、それゆえ論及することもなかった。ハンガリー革命が、私に教え論してくれたのである」(“totalitarianism”, TWB: p. 159)。

アーレントのハンガリー革命論の詳細な検討は近日公表予定の別稿にゆずることにして、ここでは要点のみ記しておく。アーレントは、国際連合の特別調査委員会による報告書(以下「国連報告」と略記)を主な情報源として(OT 1958: p. 494, p. 11)、「おおむねその論述にそってハンガ

リー革命の展開と特質を描き出しているが、二つの点では、『国連報告』にしたがっていない。一つは、政治的自由と経済的必要を厳密に区別する「古代の政治理論」の視座から、革命の過程で生まれた「革命評議会」と「労働者評議会」のうち、もっぱら前者を重視して、後者の重要性を低く見積もろうとする点である (RHR: p. 29; OT 1958: p. 488)。『国連報告』が伝える「一人の若い女子学生」の回想を、アレントは引用している——「私たちは、たとえパンやその他の生活必需品にこと欠くはめになったとしても、自由を欲したのです。私たちのような若者はとくに、嘘まみれに育てられてきたために、身動きがとれなくなっていました。ずっと嘘を吐かねばならなかった。何もかも私たちが締め上げていたので、まともに考えることができなくなっていました。私たちは、考える自由が欲しかったのです」(RHR: 23, p. 11; OT 1958: p. 494, n. 11; cf. UN 1957: p. 68, para. 392)。こうした言葉をたよりに、アレントは、ハンガリー革命がまずもって自由を求める政治的革命であり、生産手段の自主管理をめざす「労働者評議会」の意義はせいぜい二義的なものにとどまったと主張するわけであるが、『国連報告』には、「革命評議会」と並んで「労働者評議会」が枢要な役割をはたし、「その主な目的は、地方政府、工場、鉱山および他の産業諸部門に対するハンガリー人民の管理運営権を、たんなる名目ではなく、じっさいに確立することにあった」と明記されている (UN 1957: p. 84, para. 485)。にもかかわらずアレントはみずからの理論的視座にしたがい、あくまで政治と経済を厳格に区別しようとするわけであるが、この点に坎する批判は枚挙にいとまのないほどである (Heller and Feher 1990: p. 58f, pp. 85f; Stilton 1994: p. 323; Muldon 2016: p. 765; Lederman 2019: chap. 7)。5月17日の相違点は、革命下で首相を務め、革命終息後はソ連軍に捕らえられて非業の死を遂げることになったナジ・イムレの扱いである。党（ハンガリー勤労者党）内の反スターリン派として、一九五五年に一度は失脚を余儀なくされながらも、革命が起ると広範な人民の後押しで首相に復職し、一党独裁体制の解体をはじめとする民主化・自由化政策を打ち出し、ソ連軍が再侵攻するまでのあいだ、つねに革命の中心にいたナジの言行について、『国連報告』は当然ながら多くの紙幅を割きとる (UN 1957: chap. VI, etc.; cf. Heller and Feher 1980: p. 562)。ところが、アレントはほとんどナジに言及しない。『国連報告』には、「くりかえし群衆は叫んだ、われわれはナジ・イムレの政権を望む、彼に会わせてくれ」といった描写が何度も出てくるにもかかわらず (UN 1957: p. 80, para. 462)。アレントのほうは、革命の本筋とは関係なく、いかにも素気なくナジの名を挙げるだけなのである (RHR: p. 7, 23; OT 1958: p. 481, 483)。ナジをめぐるアレントの奇妙なまでの沈黙は、彼女がハンガリー革命を指導者不在の革命としてとらえていたことを示唆しているが、その意味を十分に明らかにするには、「人間の条件」および『革命について』の詳細な検討が必要となる。

(10) 一九五七年二月一日付アレント宛て書簡 (Arendt/Jaspers: S. 374f/2. 126頁以下)。このヤスパースの問いかけに、アレントがどう応答したのかは、書簡からは確認できない。

(11) 長崎浩は「学生集会」での体験を、「抜きん出た言葉とその話し手が際立ってくる」というアレント的な活動の経験として想起しつつ、「演技する卓越した個人」に目を向けるアレントの理解では、集団的な行動から生まれる「もはや誰のものでもない力」が看過されてしまうのではないかと疑問を呈している (長崎二〇一〇: 289頁——傍点森川、以下も同じ)。歴史的に見ても、革命運動のなかで生まれた「コミュニケーションはた

んに評議会の活力と自己権力という以上に、何かしら、過剰なエネルギーであった」のであり、そのエネルギーの発現形態はさまざまである。「左翼集団内部の殺し合い、あるいはガイアナの人民寺院事件やオウム真理教団の犯罪など、コミュニケーションはその病理と切り離しては記憶されえない」のであって、「革命の失われた宝としてコミュニケーションから評議会制だけを抜き取ってくる手口は、新左翼ふうの詐術になる」おそれすらあるのではないか(89頁)。あわせて、近年のアーレント研究に対する長崎の批判にも、真摯に耳を傾けねばなるまい——「今日では、公共領域や政治的コミュニケーションの欠落を指摘」するためにアーレントが参照されているが、それが右のような「革命のコミュニケーション」の危うさに直結する問題であり、「革命の政治的悲劇と集団病理から無縁のものとしては論じることができないこと」が看過されていないか。「アレントの政治論の過激さ」と不吉さが、ともに近年の議論から抜け落ちて、ように感じられる。アレントの政治哲学は、「何よりもまず普通の市民の政治参加の拡大こそ決定的に重要な意味を持つことを教えてくれる」「中略」、などという気の抜けた話であらうか(89-90頁)。

(12) この書簡をアーレントにおくった時期に、ヤスバースが執筆をすすめていた「原子爆弾と人間の将来」の一節(『Aspects 1968, S. 432, 438』。なお、ウェーバーを師と仰ぐヤスバースと、アーレントの政治観の違いについては、Thornhill 2002を参照。

(13) モーゲンソー(Hans Joachim Morgenthau: 1904-80)はアーレントと同じくユダヤ系ドイツ人で、一九三七年にアメリカに亡命し、四三年に市民権を取得している。アーレントとは五〇年代初頭に知り合い、シカゴ大やニュースクール・フォア・ソーシャル・リサーチでは何度も同僚となり、「エルサレムのアイヒマン」が巻き起こしたいわゆる「アイヒマン論争」のためにアーレントがほとんど孤立無援の状態に陥ったさいにも、数少ない彼女の擁護者の一人としてあつた。なお、夫ハインリヒを亡くした晩年のアーレントに対し、モーゲンソーは「友情を結婚を切り替える」提案をおこない、アーレントは躊躇なくこれを拒絶したが、その後も二人の交友は途絶えることなく続いたとのよしである(Young-Bruhl 1982: p.349, 354; Young-Bruhl 2006: p. 344)。

(14) モーゲンソー再評価の動向と呼応するかのよう、国際関係理論の観点からアーレントの政治思想を再解釈する研究も現われてゐる(F.A. Lang and J. Williams 2005)。P. オウエンスによれば、アーレントは古典古代を理想化するロマンティックな政治思想家ではなく、国際関係における暴力現象を冷徹に分析する「批判的リアリズム」の徒である(Owens 2007)。

(15) 『アメリカ政治の目的』の謝辞には、G・ケナンやH・キッシンジャーらと並んでアーレントの名が見え、「革命について」の文献一覧には、「アメリカ政治の目的」が挙げられている。「アメリカ政治の目的」を含めたモーゲンソーの政治思想については、W・シヨイアマンと宮下豊の詳細かつ包括的な研究が参照されるべきであるが(Scheuerman 2009, esp. chap. 6; 宮下二〇二二、特に第6章)、両者のモーゲンソー解釈は完全に一致しているわけではない。シヨイアマンは、モーゲンソーの政治思想のなかの、相矛盾する二つの契機に着目する。一つは、亡命前の社会民主主義に近い立場から労働政策や国際法研究に取り組んでいた時期に形成された、規範的理念にもとづいて現実の批判と改革をめざす「批判的リアリスト」の契機であり、今一つは、政治とは友と敵の闘争であるというシュミットの政治観、また人間は無意識の欲動に抗えないというフロイトの人間観の影響のもと、力による抗争に政治および人間の悲劇的本性を見いだす「リアリスト」の契機である(Scheuerman 2009, pp.

44頁) フロイトの影響については、Schuetz 2010も参照)。いわゆる古典的リアリズムの祖モーゲンソーに連なるのが後者の契機であることは言うまでもないが、シヨイアマンによれば、一九六〇年代以降の国際秩序論や米国内の社会改革論においては、むしろ「批判的リアリスト」の契機がふたたび前面に現われてくるという。しかし同時にシュミットの政治観のほうも根強く残り、結局のところ、モーゲンソーにおいて如上二つの契機が統合されることはなかった(Scheuerman 2009, pp. 88f, 106f, 138f)。こうしたシヨイアマンの解釈は、主権国家秩序を超えた国際的秩序を構想する彼自身の理論的関心を背景として「ごんごん」と思われるが(Scheuerman 2011)、宮下は、「亡命前の思想形成」を踏まえた「ほぼ唯一」のモーゲンソー研究としてシヨイアマン書を高く評価しつつ、整合的な説明には成功して「ごんごん」と批判する(宮下二〇一三: 76頁以下)。そして、「絶対的な道徳秩序が存在するという一種の信仰が、亡命前より一貫して伏流している」ことを重視して、「道徳的秩序の再建」という「規範的関心」という視座から、モーゲンソーの「政治的リアリズム」の整合的な解釈をめざす(44頁)。しかしながら厄介なことに、モーゲンソーは「道徳的秩序」の客観的基準を明示していない。「亡命後の著作のなかでしばしば言及した「客観的基準」等の諸概念は、そうした「伝統的な」宗教や自然法のいわば機能的代替物として提起されたものである。その一方でモーゲンソーは、この「客観的基準」の実質は不可知である」と一貫して考えていたため、そうした基準に照らして現実を裁断することは例外であった」(45頁——傍点森川。「客観的基準」の存在を確信していたとしても、その実質が「不可知」であるなら、それは政治を統御する規範の「機能的代替物」にはなり得ないはずである。とすれば、やはりシヨイアマンが結論づけるように、モーゲンソーの政治思想は、どこまでも理念(当為)と現実(存在)のあいだで引き裂かれた状態にとどまる、ということになるのではないか。

(16) このように、建国の目的ないし原理のうちには、合衆国のユニークさを求める彼ら二人の見方に、一種のアメリカ例外主義(American exceptionalism)を見いだすことができるかもしれない。ただし、ヨーロッパ旧世界からの自立や分離に力点をおく通例のアメリカ例外主義とは異なり、元亡命者二人によって強調されるのは、むしろ新旧世界の連続性である。「重要なことは、アメリカとは、よきにつけ悪しきにつけ、つねにヨーロッパの人間の企てである、ということである。アメリカ革命のみならず、それより以前に、またそれより後に起こったこともすべて、大西洋文明全体の内なる出来事であった」(OR: p. 129, 210頁——傍点森川)。アーレントにとって、アメリカはあくまでヨーロッパの延長、いわば近代になって大西洋の対岸に出現したもう一つのヨーロッパであり、旧大陸が全体主義の暴力に蹂躪された現代にあつては、いわばヨーロッパの最良の部分の「保存と増大」に努めるべき位置にある。同様の認識は、モーゲンソーにも共有されている——「アメリカは、西側世界のローマとアテネに、すなわち、西側の法的秩序の基盤と文化的源泉に、なつてしまつたのである。ところが、アメリカはそのことを知らない」(Morgenthau 1960: p. 6——傍点森川)。この一文には、冷戦下で西側陣営の盟主となつた合衆国が果たすべき責務に対する洞察と期待、しかしその責務の理念的意味に無頓着なアメリカ人たちに對する失望と苛立ちがこめられていると言えらるだろう。こうして二人は、いわば「アメリカのヨーロッパ人」として、アメリカ人が忘れたアメリカの本質を当のアメリカ人に教諭する、という役割を引き受けたわけである。それは、アメリカ人と(西)ヨーロッパの人々が、たがいに對して抱く誤解や不信をとりのぞこうとするアーレントの努力にもあらわれているが(St. EU: pp.

409-17, pp. 423-7) たほうで、そうした特異な立ち位置じたいが、アメリカ人のあいだに、理解や視座の齟齬を生み出していた側面は少なくない。

(17) 革命期の「公的幸福」という概念がゆがめられ、富（の追求）と同義になってしまったという批判は、アーレントのそれと同じであるが、「公的幸福」の理解は、アーレントのそれとは異なる。

(18) アーレントもモーゲンソーも、アメリカの大義を当のアメリカ人に教へ諭すという姿勢を崩さなかったが（注(16)参照）、その背景には、亡命知識人とアメリカ社会との入り組んだ関係が存するように思われる。アドルノについてオッフエが指摘するように、ナチの迫害から逃れてきた亡命者にとって、アメリカは、自分を「救ってくれた」国として「恩義」の対象であるとともに、「不安定な物質的な状況」のなかで生計を立てるべく、「自分で選んだわけではない仕事に従事」することを強いられる場所でもあった。こうした「恩義」と「疎外」の狭間で、アドルノのアメリカに対する視座と態度は、分裂と緊張を孕んだものとなる——「たしかに彼は一九四三年にアメリカ国籍を取得したが、決してアメリカ人の「アイデンティティ」を受け入れることはなかったのである」（オッフエ二〇〇九・〇〇九頁）。戦後も合衆国民としてアメリカにとどまることを選んだアーレントやモーゲンソーについても、如上のアイデンティティの問題にかんずるかぎり、事情は変わらないと言てよいが、ここには「世代」という要素も関係している。アドルノ（一九〇三年生）、モーゲンソー（一九〇四年生）、アーレント（一九〇六年生）は、いずれも戦間期のドイツで知的な修養をつみ、しかし研究者や知識人として名を挙げるまえにドイツを去ることを余儀なくされた人びとである。すなわち彼らは、E・カッシーラー（一八七四年生）、Th・マン（一八七五年生）、H・ケルゼン（一八八一年生）のように、功成り名遂げた亡命知識人として迎えられたわけではなく、無名の亡命者としてアメリカの地を踏んだのであり、不慣れた英語と格闘しながら職を探し、一からキャリアを積んでいかねばならない境遇に置かれたのである。知的サバイバルの武器となったのは、亡命以前に故国で培った古典的教養と学問的研鑽であり、それはアメリカ知識社会の人びとを驚嘆させるとともに、彼ら亡命者とアメリカの知的・学問的世界のあいだに溝をうがつ要因ともなった。

三六年に亡命し、ナチ体制の先駆的研究である「Eヒモス」（一九四二）を著してアーレントの全体主義論にも大きな影響を与えたF・ノイマン（一九〇〇年生）の述懐を例にとると、いっぽうで彼は、自由な議論をおもひするアメリカの大学の雰囲気と、その背景をなすアメリカ社会のひらかれた気風をたかく評価し、とりわけ、故国ドイツの大学では実学重視と専門分化の潮流のなかで空虚な理念に墮してしまった「フンボルト的な教養主義」が、「リベラル・アーツ」を重んじる「アメリカのカレッジ」で活き活きと実践されていることに、称賛を惜しまない（Zweig and 1963・p. 1620）。言いかえれば、アメリカの知識社会の側にも、亡命者たちがドイツからもちこんだ該博な教養を受け入れ、讚美する素地があったわけであり、アーレントが「ドイツの哲学と教養bildung全体力と威信」によってニューヨーク知識人たちを圧倒した、といったエピソードも、こうした背景から理解することができる（King 2015・p. 121）。しかし、たほうでノイマンは、現今のアメリカにおける実証科学化の傾向には違和感をかくさず、とりわけ「経験的データの集積に対する過大評価」や、「社会科学が世界を変えうる可能性についての尋常ならざるオプティミズム」を問題視する。そこに欠けているのは、歴史的事象の偶然性とそれを把握する人間理性の限界にまつわる「懐疑」の精神と、かかる限

界のなかで歴史的事象を厳密かつ体系的に捉えるための「理論的枠組み」であり、まさにこの「懐疑」の精神と「理論的枠組み」こそが、ながき伝統のなかで概念的思考を磨いてきた亡命ドイツ知識人がアメリカにもちこんだものであり、これをアメリカの諸学が受け入れるならば、「新しい経験と古き伝統の統合」が可能となるだろう、という (Neumann 1953: p. 24)。

科学や進歩への楽観主義に対してノイマンが抱いたのと同種の違和を、モーゲンソーおよびアーレントのJ・デュレイに対する激しい反発に見て取ることができる。モーゲンソーいわく、科学を万能の道具とみなす「科学的人間」の典型であるデュレイのもとでは、「政治的術策は科学的計画」に、政治的決定は科学的解決に、政治家は「専門家」に「……」置き換えられるべきものとなる」のであり、「道德的な問題」でさえ「工学的な課題 engineering issue, になつてしまふ」であらう (Morgenthau 1946: p. 28f. 30)。そこには、アウグスティヌスからフロイトに至るヨーロッパの思想家が直視してきた、欲望をもつ存在であるがゆえに「悪 evil」をなすという人間の「暗い側面 dark side」へのリアルな眼差しが、完全に欠落しているのである (p. 204f; cf. 宮下二〇二: 95-100)。アーレントもまた、科学の進歩を無邪気にことごとくデュレイのプラグマティズムは、「地獄が「……」科学的計画を通して完成される」という二〇世紀の現実を無視している、と論難する。「常識という象牙の塔のなかに住んでいる自立派な学者だけが、あるカテゴリに属する人々が、かつての奴隷や農奴よりも今日はるかに劣悪な状況にあるという事実、これほど無頓着でいられるのだ。あの極限的な死の工場を引き合いに出すまでもないだろう。ナチス体制は崩壊したが、強制収容所は相変わらず存在し続けており、いまや誰もが認めるものとなつてゐる、というのに」(『The Ivory Tower of Common Sense』, EU: p. 194f/1・246頁以下)。

デュレイの哲学思想の内在的理解にもとづく批判というより、科学や社会の進歩に対するデュレイの楽観主義的な姿勢に対する反発ないし嫌悪と評すべきかもしれないが、ナチズムの恐怖を感じていた亡命者と、彼らを迎え入れたアメリカ人の普通感覚 (common sense) とのあいだの深刻なギャップを見てとることができる (cf. King 2015: pp. 156-8)。それがまた、アーレントやモーゲンソーを、このお気楽なアメリカ人たちに合衆国がはたすべき役割や責務を教えてやらねば、という思いへと駆り立てることになったわけである。

(参照文献)

アーレントの著作等については略号をもちいて、その他の文献については著者・出版年によって示している。引用文中の亀甲括弧 () () の部分は、筆者による補足であることを示す。なお、邦訳のある著作については、できるかぎり参照しているが、適宜変更している。訳文の責任はすべて筆者にある。

アーレントのテキスト (書名・略号アルファベット順)

(著作)

BPF: *Between Past and Future*, Penguin Books, 1968 (引田隆也・齋藤純一訳「過去と未来の間——政治思想への8試論」みすず書房、一九九四

年

- COR *Crises of the Republic*. Harcourt Brace & Company, 1972. (山田正行訳『暴力たいてー——共和国の危機』みすず書房、二〇〇〇年)
- EU *Essays in Understanding, 1930-54*, ed. by J. Kohn. Harcourt Brace & Company, 1994. (齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳『アーレント政治思想集』一・二二、みすず書房、二〇〇二年)
- EUTH *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*. Piper, 1986 (1985). (大久保和郎・大島通義・大島かおり訳『全体主義の起源』一・二二・三、みすず書房、二〇一七年)
- HC *The Human Condition*. Chicago University Press, 1958. (志水速雄訳『人間の条件』ちへま学芸文庫、一九九四年)
- MDT *Men in Dark Times*. Harcourt Brace & Company, 1968. (岡部斉訳『暗い時代の人々』河出書房新社、一九七二年)
- Mag *Macht und Gewalt*. Piper, 1993.
- OR *On Revolution*. Penguin Books, 2006 (1963). (志水速雄訳『革命たいてー』ちへま学芸文庫、一九九五年)
- OT *The Origins of Totalitarianism* (new edition with added Prefaces). Harcourt Brace, 1973. (※EUTHの英語版)
- OT 1958 *The Origins of Totalitarianism*. Harcourt Brace, 1958. (※この版の収録がなれずの“Epilogue: Reflections on the Hungarian Revolution”を箇訳や参照)
- RHR “Totalitarian Imperialism: Reflections on the Hungarian Revolution.” *The Journal of Politics*, XX-1, 1958.
- TWB *Thinking without a Banister: Essays in Understanding 1953-1975*, edited and with an introduction by J. Kohn. Schocken Books
- (書簡・ハンタムトナー等)
- Arendt/Blicher *Hannah Arendt/Heinrich Blicher: Briefe 1936-1968*. Hsg. von L. Köhler. Piper, 1996. (大島かおり・初見基訳『アーレントとリンネヒューヤー往復書簡一九三六—一九六八』みすず書房、二〇一四年)
- Arendt/Jaspers *Hannah Arendt/Karl Jaspers: Briefwechsel 1926-1969*, hsg. von L. Köhler und H. Saner. Piper, 1985. (大島かおり訳『アーレントとヤスパーズ往復書簡一九二六—一九六九』一・三三、みすず書房、二〇〇四年)
- OHA “On Hannah Arendt” (1972), in *Hannah Arendt: the Recovery of the Public World*, ed. by Hill, M.A., St. Martin's Press, 1979

参照文献 (欧文)

- Arnett, Ronald C. (2013) *Communication Ethics in Dark Times: Hannah Arendt's Rhetoric of Warning and Hope*. Southern Illinois University Press

- Arnold, Jeremy (2020) *Across the Great Divide: Between Analytic and Continental Political Theory*, Stanford UP.
- Brown, Wendy (2010) *Walled States. Waning Sovereignty*, Zone Books
- Brown, Wendy (2015) *Undoing the Demos: Neoliberalism's Stealth Revolution*, Zone Books (中井亜矢子監『ふたごじつ民主主義は失われていくのか——新自由主義の思ひやりと攻撃』、ちくま新書房、二〇一七年)
- Brown, Wendy (2019) *In the Ruins of Neoliberalism: the Rise of Antidemocratic Politics in the West*, Columbia University Press
- Brown, Wendy (2020) "Why Is Democracy So Hard?" (University of California, Berkeley Memorial Lecture for Erik Olin Wright, January 2020), *Politics & Society*: 48-4
- Butler, Judith (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge (中井亜矢子監『ジャンヌ・ド・マンヌ——フランク・フォード・トマンネン・トマンネン・トマンネン』、青土社、一九九九年)
- Butler, Judith (2004) *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*, Verso (『いのちのふたご——哀悼と暴力の政治学』、白水社、二〇〇七年)
- Canovan, Margaret (1992) *Hannah Arendt: A Reinterpretation of her Political Thought*, Cambridge University Press (カントマン『カントと政治思想』、中井亜矢子監・中井亜矢子監、白水社、二〇〇四年)
- Cesarani, David (2004) *Becoming Eichmann: Rethinking the Life, Crimes, and Trial of a "Desk Murderer"*, Da Capo Press
- Cohen, J.L. and Arato, A. (1992) *Civil Society and Political Theory*, The MIT Press
- Connolly, William (2000) *NeuroPolitics: Thinking, Culture, Speed*, University of Minnesota Press
- Connolly, William (2008) *Capitalism and Christianity, American Style*, Duke University Press
- Connolly, William (2011) *A World of Becoming*, Duke University Press
- Connolly, William (2013) *The Fragility of Things: Self-Organizing Processes, Neoliberal Fantasies, and Democratic Activism*, Duke University Press
- Finlayson and Freyenhagen (ed.) (2011) *Habermas and Rawls: Disputing the Political*, Routledge
- Fitzpatrick and A. Lüdke (2009) "Emerging the Everyday: On the Breaking and Making of Social Bonds in Nazism and Stalinism", *Beyond Totalitarianism: Stalinism and Nazism Compared*, ed. by M. Geyer & S. Fitzpatrick, Cambridge University Press
- Forrester, Katrina (2019) *In the Shadow of Justice: Postwar Liberalism and the Remaking of Political Philosophy*, Princeton University Press
- Frank, Jason (2010) *Constituent Moments: Enacting the People in Postrevolutionary America*, Duke University Press
- Habermas, Jürgen (1977) "Hannah Arendt's Communication Concept of Power", *Social Research*, vol.44, no.1

- Habermas, Jürgen (1990) *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Suhrkamp (集巻・田田編『公共性』講談社学芸文庫(第11巻)』未來社 一九九六年)
- Habermas, Jürgen (1992) *Faktizität und Geltung. Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats*, Suhrkamp (原典・田田編『論法と政治——法と政治国家の理論論争』集巻・田田編『公共性』未來社 二〇〇一—二〇〇二年)
- Hauptmann, Emil (2004) "A Local History of the Political", *Political Theory*, vol.32, no.1
- Harvey, David (2003) *The New Imperialism*, Oxford University Press
- Heller, Agnes and Feher, Ferenc (1980) "Hungary, 1956: The Anatomy of a Political Revolution", *Radical America*: Vol. 14, no. 1
- Heller, Agnes and Feher, Ferenc (1990) *From Yalta to Glasnost. The Dismantling of Stalin's Empire*, Basil Blackwell
- Hirst, Paul (2005) *Space and Power: Politics, War and Architecture*, Polity Press
- Honig, Bonnie (1993) *Political Theory and the Displacement of Politics*, Cornell University Press
- Honig, Bonnie (2009) *Emergency Politics: Paradox, Law, Democracy*, Princeton University Press
- Honohan, Iseult (2002) *Civic Republicanism*, Routledge
- Jaspers, Karl (1958) *Die Aombombe und die Zukunft des Menschen*, Piper; Neuauflage 1982 (飯島崇亨・細野隆雄『現代の政治意識：原爆と人間の将来』下、講談社 一九七六年)
- Jay, Martin (1978) "Hannah Arendt: Opposing Views", *Partisan Review* vol. 45, no.3
- Kalyvas, Andreas (2008) *Democracy and the Politics of the Extraordinary: Max Weber, Carl Schmitt, and Hannah Arendt*, Cambridge University Press
- Kateb, George (1984) *Hannah Arendt: Politics, Conscience, Evil*, Rowman & Allanheld
- King, Richard H. (2015) *Arendt and America*, Chicago University Press
- Klusmeyer, Douglas B. (2011) "The American republic, executive power and the national security state: Hannah Arendt's and Hans Morgenthau's critiques of the Vietnam war". *Journal of International Political Theory* 7 (1) F.A. Lang and J. Williams (eds.) (2005) *Hannah Arendt and International Relations*, Palgrave Macmillan
- Lederman, Shmuel (2019) *Hannah Arendt and Participatory Democracy: A People's Utopia*, Palgrave Macmillan.
- Lebow, Richard N. (2016) "Hans Morgenthau and The Purpose of American Politics", *Ethics and International affairs*: 30-1
- Levine, Daniel J. (2012) "Why Hans Morgenthau Was Not a Critical Theorist (and Why Contemporary IR Realists Should Care)", *International Relations*: 27 (1)
- Linz, Juan J. (2000) "Further Reflections", *Totalitarian and Authoritarian Regimes: with a major new Introduction*, Lynne Rienner Publishers

- Mckenna, George (1984) "Bannisterless Politics: Hannah Arendt's and her Children", *History of Political Thought*, vol. 5, no. 2
- Morgenthau, Hans J. (1946) *Scientific Man vs. Political Power*.
- Morgenthau, Hans J. (1960) *The Purpose of American Politics*. Alfred A. Knopf.
- Morgenthau, Hans J. (1976) "Hannah Arendt 1906-1975", *Political Theory*, IV-1
- Morgenthau, Hans J. (1977) "Hannah Arendt on Totalitarianism and Democracy", *Social Research*, vol. 44, no. 1
- Muldoon, James (2016) "The Origins of Hannah Arendt's Council System", *History of Political Thought*, vol. 73, no. 4
- Myers, Eila (2013) *Worldly Ethics: Democratic Politics and Care for the World*. Duke University Press
- Neumann, Franz L. (1953) "The Social Sciences", *The Cultural Migration: the European Scholar in America*. University Pennsylvania Press
- Nixon, John (2015) *Hannah Arendt and the Politics of Friendship*. Bloomsbury
- Owens, Patricia (2007) *Between War and Politics: International Relations and the Thought of Hannah Arendt*. Oxford University Press (中本義
 彦・矢野久美子訳『戦争と政治の空間——ハンナ・アレントの国際政治思想』、岩波書店、二〇一四年)
- Pettit, Philip (1997) *Republicanism: A Theory of Freedom and Government*. Oxford University Press
- Pitkin, Hanna F. (1967) *The Concept of Representation*. University of California Press (田中義彦『代表の概念』、岩波書店、二〇一七年)
- Pitkin, Hanna F. (1981) "Justice: On Relating Private and Public", in *Political Theory*: vol. 9, no. 3
- Pitkin, Hanna F. (1998) *The Attack of the Blob: Hannah Arendt's Concept of the Social*. Chicago University Press
- Pitkin, Hanna F. (2004) "Representation and Democracy: Uneasy Alliance", *Scandinavian Political Studies*, Vol. 27, no. 3
- Pitkin, Hanna F. and Rosenblum, Nancy L. (2015) "A Conversation with Hanna Pitkin", *Annual Review of Political Science*, Vol. 18
- Pocock, J.G.A., *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, with a new afterword by the
 author. Princeton University Press, 2003 (1st 1975) (田中義彦・奥田謙・森岡邦泰訳『「キヌチニオン」・ギョームン』、岩波書店、
 二〇〇八年)
- Rawls, John (1969) "The Justification of Civil Disobedience", in *Civil Disobedience: Theory and Practice*, edited by Hugo A. Bedau. Pegasus
- Rawls, John (1996) *Political Liberalism. Political Liberalism: with a New Introduction and the "Reply to Habermas"*. Columbia University Press
- Rawls, John (1999a) *A Theory of Justice, revised edition*. Harvard University Press (『正義論 改訂版』、川本雄三・櫻間隆・神崎隆十監訳、岩波
 書店、二〇一〇年)
- Rawls, John (1999b) *The Law of Peoples: with "The Idea of Public Reason Revisited"*. Harvard University Press (『人民の法』、中山章一訳、岩波
 書店、二〇〇六年)。

- Rawls, John (2001) *Justice as Fairness: A Restatement*, (ed) Erin Kelly, Harvard University Press (田中成昭訳『公正な社会の正義・再論』、岩波書店 1100頁中)
- Rawls, John (2007) *Lectures on the History of Political Philosophy*, (ed) Samuel Freeman, Harvard University Press (斎藤保一他訳『ローレンス政治学外典選集』、岩波書店 1101頁中)
- Rösch, Felix (2013) "Realism as Social Criticism: The thinking partnership of Hannah Arendt and Hans Morgenthau", *International Politics*: 50 (6)
- Scheuerman, William E. (1998) "Hannah Arendt's Challenge to Carl Schmitt", *Law as Politics: Carl Schmitt's Critique of Liberalism*, edited by Dyzenhaus, D., Duke University Press
- Scheuerman, William E. (2009) *Morgenthau, Polity*
- Scheuerman, William E. (2011) *The Realist Case for Global Reform*, Polity
- Schmitt, Carl (1926) *Die geistesgeschichtliche Lage des heutigen Parlamentarismus*, Duncker & Humboldt (堀口謙一訳『現代議会主義の精神史的研究』、岩波書店 1101頁中)。
- Schmitt, Carl (1932) *Der Begriff des Politischen*, Duncker & Humboldt (田中聖・堀田恒雄訳『政治学の本質』、未來社 1970年)
- Schmitt, Carl (1933) *Stat, Bewegung, Volk: Die dreigliederung der politischen Einheit*, Hamburg
- Schuett, Robert (2010) *Political Realism, Freud, and Human Nature in International Relations*, Palgrave Macmillan
- Shklar, Judith N. (1998) *Political Thought and Political Thinkers*, edited by S. Hofmann, Chicago University Press
- Siegelberg, Mira L. (2013) "Things Fall Apart: J.G.A. Pocock, Hannah Arendt, and the Politics of Time", *Modern Intellectual History*: 10-1
- Sitton, John F. (1994) "Hannah Arendt's Argument for Council Democracy", in *Hannah Arendt: Critical Essays*, eds. L. Hinchman and S.K. Hinchman, SUNY Press
- Skinner, Quentin (2016) *Thinking about Liberty: An Historian's Approach*, Leo S. Olschki
- Srangneth, Bettina (2011) *Eichmann vor Jerusalem: das unbehelligte Leben eines Massenmörders*, Arche
- Suba, Hans (2014) *Politics and the Search for the Common Good*, Cambridge University Press
- Taylor, Charles (1985) *Philosophy and the Human Sciences: Philosophical Papers 2*, Cambridge University Press
- Taylor, Charles (1995) *Philosophical Arguments*, Harvard University Press
- Thornhill, Chris (2002) *Karl Jaspers: Politics and Metaphysics*, Routledge
- Tsao, Roy (2004) "Arendt and the Modern State: Variations on Hegel in the Origins of Totalitarianism", *The Review of Politics*: 66-1.
- Tucker, Aviezer (2015) *The Legacies of Totalitarianism: A Theoretical Framework*, Cambridge University Press

- United Nations [UN] (1957). *Report of the Special Committee on the Problem of Hungary*. New York: Urbinati, Nadia (2019) *Me the People: How Populism Transforms Democracy*. Harvard University Press
- Waldron, Jeremy (2000) "Arendt's constitutional politics". *The Cambridge Companion to Hannah Arendt*, edited by D. Villa. Cambridge UP.
- Waldron, Jeremy (2013) "Political Political Theory: An Inaugural Lecture". *The Journal of Political Philosophy*: 21-1
- Wolin, Sheldon S. (2004) *Politics and Vision: Continuity and Innovation in Western Political Thought (Expanded Edition)*. Princeton University Press (『政治とビジョン』、尾形典男・福田敏一監訳、福村出版、二〇〇七年)
- Young-Bruhl, Elisabeth (1982) *Hannah Arendt: For Love of the World*. Yale University Press (荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳「ハンナ・アーレント伝」、晶文社、一九九九年)
- Young-Bruhl, Elisabeth (2006) *Why Arendt Matters*. Yale University Press (矢野久美子訳「なぜアーレントが重要なのか」、みすず書房、二〇〇八年)

参考文献（邦語）

- 東浩紀（二〇一五）『一般意志2：0——ルソー、フロイト、ゲーゲル』（講談社文庫）
- 東浩紀（二〇二〇）『ゲンロン戦記——「知の観客」をつくる』（中公新書ラクレ）
- 石田雅樹（二〇〇九）『公共性への冒険——ハンナ・アーレントと〈祝祭〉の政治学』、勁草書房
- 市田良彦・王寺賢太（編）（二〇一六）『現代思想と政治』、平凡社
- 稲葉振一郎（二〇一七）『政治の理論——リベラルな共和主義のために』、中公叢書
- 植村邦彦（二〇一〇）『市民社会とは何か——基本概念の系譜』、平凡社新書
- 上村忠男（一九九七）『評議会幻想』、一九九七年七月号
- 岡野八代（二〇二〇）『ケアの倫理は、現代の政治的規範たりうるのか？』、『思想』第一一五二号
- 岡本仁宏（二〇〇四）『市民社会』、古賀敏太（編）『政治概念の歴史的展開』、晃洋書房
- オッフエ、クラウス（二〇〇九）『アメリカの省察——トクヴィル・ウェーバー・アドルノ』、野口雅弘訳、法政大学出版会
- 乙部延剛（二〇一九）『エートスの陶冶とは何か？——成熟の理論としての闘技デモクラシー論』、日本政治学会編『年報政治学二〇一九』、筑摩書房

小野紀明（一九九六）『二十世紀の政治思想』、岩波書店

亀本洋（二〇二二）『格差原理』、成文堂

川崎修 (二〇一〇 a) 『ハンナ・アレントと現代政治思想——アレント論集Ⅱ』、岩波書店

川崎修 (二〇一〇 b) 『政治的なるもの』の行方』、岩波書店

川崎修 (二〇一四) 『ハンナ・アレント』、講談社学術文庫

金慧 (二〇一〇) 『自律と自由…自己尊重の社会的基盤をめぐって』、『政治経済学の規範理論——田中愛治監修、勁草書房

古賀敬太 (二〇一九) 『カール・シュミットとその時代』、みすず書房

権左武志 (二〇二〇) 『現代民主主義 思想と歴史』、講談社

佐藤一進 (二〇一四) 『保守のアポリアを超えて——共和主義の精神とその変奏』、NIT出版

ジャッド、トニー (二〇〇八) 『ヨーロッパ戦後史』上・下、森本醇・浅沼登訳、みすず書房 (原著二〇〇五)

スナイダー、ティモシー (二〇一五) 『ブラッドランド——ヒトラーとスターリン 大虐殺の真実』(上・下)、布施由紀子訳、筑摩書房 [原著二〇一〇]

田中将人 (二〇一七) 『ロールズの政治哲学——差異の神義論』正義論』、風行社

寺島俊穂 (二〇〇四) 『市民的不服従』、風行社

寺島俊穂 (二〇一三) 『ハンナ・アレントの政治理論——人間的な政治を求めて』、ミネルヴァ書房

長崎浩 (二〇一〇) 『共同体の救済と病理』、作品社

日本アレント研究会編 (二〇二〇) 『アレント読本』、法政大学出版社

野口雅弘 (二〇一八) 『付度と官僚制の政治学』、青土社

早川誠 (二〇一四) 『代表制という思想』、風行社

ハーバーマス、ユルゲン (二〇一四) 『政治的なもの』、ハーバーマス他『公共圏に挑戦する宗教——ポスト世俗化時代における共棲のために』箱田徹、金城美幸訳、岩波書店 (原著二〇一一)

福田有広 (一九九八) 『共和主義』、『岩波 哲学 思想事典』、岩波書店

福田有広 (二〇〇二) 『共和主義』、福田有広・谷口将紀編『デモクラシーの政治学』、東京大学出版社

ポルトアンズキー、リュック&シャペロ、エウ (二〇一三) 『資本主義の新たな精神』、三浦直希他訳、ナカニシヤ出版

牧野雅彦 (二〇一五) 『精読 アレント』全体主義の起源』、講談社選書メチエ

マゾワー、マーク (二〇一五) 『暗黒の大陸——ヨーロッパの二〇世紀』、中田瑞穂・網谷龍介訳、未來社 (原著一九九八)

三浦隆宏 (二〇二〇) 『活動の奇跡——アレント政治理論と哲学カフェ』、法政大学出版社

宮下豊 (二〇一〇) 『ハンス・モーゲンソーの国際政治思想』、大学教育出版

ミュラー、ヤン・ヴェルナー（二〇一九）『試される民主主義——二〇世紀ヨーロッパの政治思想』上・下、板橋拓己・田口晃監訳、岩波書店（原著二〇一一）

毛利透（二〇二〇）『国家と自由の法理論——熟議の民主政の見地から』、岩波書店

森川輝一（二〇〇〇）「ハンナ・アレントの活動概念（二・完）」、『法学論叢』第一四七卷二号

森川輝一（二〇〇四）「公共性」古賀敬太（編）『政治概念の歴史的发展』、晃洋書房

森川輝一（二〇一〇）「始まり」のアレント——「出生」の思想の誕生、岩波書店

森川輝一（二〇一五）「ジョージ・ケイティブの政治理論について——そのアレント批判をてがかりに」、『名城法学』第五九卷第二号

森川輝一（二〇一六）「アレントのソボクレス解釈——ハイデガーとの対向のなかで」、『法学論叢』一七六卷五・六号

森川輝一（二〇一七a）「メルヴィルを読む——空間と力の政治思想」、韓国政治思想学会編『政治思想研究』二二—二、韓国政治思想学会

森川輝一（二〇一七b）「アレントの『活動』論再考——『評議会』論を手がかりに」、川崎修・萩原能久・出岡直也（編）『アレントと二〇世紀の経験』、慶應義塾大学出版会

森川輝一（二〇一七c）「引かれ者の小唄——『大陸系』政治哲学が語ろうとすること、『分析系』政治哲学が語らないこと」、『Nりとニユクス』第四号

森川輝一（二〇一七d）「政治の固有性をめぐって」、『人文学報』一一〇号、京都大学人文科学研究所

矢野久美子（二〇一七）「ハンナ・アレント——『戦争の世紀』を生きた政治哲学者」、中公新書

『現代思想』一九九七年七月号「特集ハンナ・アレント」、青土社

（※）本論文は、科学研究費補助金（19H00579）による研究成果の一部である。